

はなくらべしきのことぶき
花競四季寿

まんざい
万才

先づ初春のあしたには、門に松立て寿を祝ふ熨斗目や熨斗昆布。千代とゆづり葉
あざやかに告げて行くらん鶯の、声ものどけき春の空。実に九重のにぎくと、
いつまで尽きぬ竹本のその一節の世をこめて、幾万歳と祝ひける

徳若に御万才と御代も栄えます。愛敬ありける新玉の年たちかへるあしたより
水も若やぎ木の芽も咲き、栄えけるは誠にめでたう候ひける

京の司は関白殿、おりぬの帝、日の本内裏、王は十善神は九善、よろづ安々うら
安が木の本に、正月三日寅の一天に誕生します若るびす、商ひ神と祝はれ給ふ、
商ひ繁昌と守らせ給ふは誠にめでたう候ひける

八瀬女やしよめ、京の町の八瀬女、売つたるものは何々、大鯛小鯛、鰯の大魚、鮑
さざい、蛤子蛤子蛤々々召さいなど売つたる者は八瀬女そこを打ち過ぎ側の棚見た
れば金欄緞子、緋紗綾緋縮緬、縺子緋縺子縺縺子縺珍、いろく結構に、飾り立て、

候ひしが町々の、小娘御や、お年の寄りし姥たちまで、売り交ふ有様は実に治まる
御代なれ時なれ

恵方の御蔵にずつしりくくくずつし、宝も納まる。門には門松、瀬戸には瀬
戸松。そつちもこつちも幾年の御祝ひと、御代ぞめでたき

関寺小町

身はうき草をさそふ水く、なきこそ悲しかりけれ、今は民間賤しずの女めにさへきたなまれ、諸人に恥はぢを晒さらし嬉うれしからぬ月日身に積もつて、百歳ももせの姥おばとなりて候

誰かは我を留とどむらん。この関寺の草の戸を、明け暮れ恋しやと思ひし事もまた昔となる、百歳の姥が身の恥はぢづかしやとて市女笠いちめがさ、覆くふ日影くれたけや呉竹くれたけの杖すに縫ぬりてよろ

くくくと立ち出で見れば逢坂おうさかの席せきの清水しみずに影映かげうつる。老いの姿すがたのア、ア、恥はぢづかしや

かの深草ふかくさの少将しょうしょうの雨あめの降ふる夜も降ふらぬ夜も、風の吹く夜も吹かぬ夜も、思おもひに消えしその報うらい哀あはれ実まことに古いにしえは花はなの姿すがたと言いはれしもいつの間にか衰しよわへて、盛者じようしゃ必衰ひつすいの

理ことわりは

たゞ目の前まへと恐おそしや

因果いんぐわは巡り車めぐりぐるまの榻しじに百夜通ももよとよへど虚言そらごとを誠まことと思おもひ積たもりしは、罪障ざいしょうの山高たかく生死しようじの海うみ深ふかき、その怨念うらみの添そふやらん。かやうにもものに狂くるふぞや移うつろふものは世よの中なかの人の心こころの花はなや見る

よその見る目はな、恋こすりや床とこし。いとし可愛かわいゆさがそれが真実まことならば、そのな、なんく情なさけけのそれが誠まことか、てんと誓文ちかごころ二世三世嬉うれしえ、ほんにくえ、憂うれきが中ちゆうにも楽しみ、そのな、なんく情なさけけのそれが誠まことか、てんと誓文ちかごころ二世三世しえ、

ほんにくえ、憂きが中にも楽しみ

心づいて身繕ひ、いざやと立つて関寺の、柴の庵に帰りけり柴の庵に帰りけり